

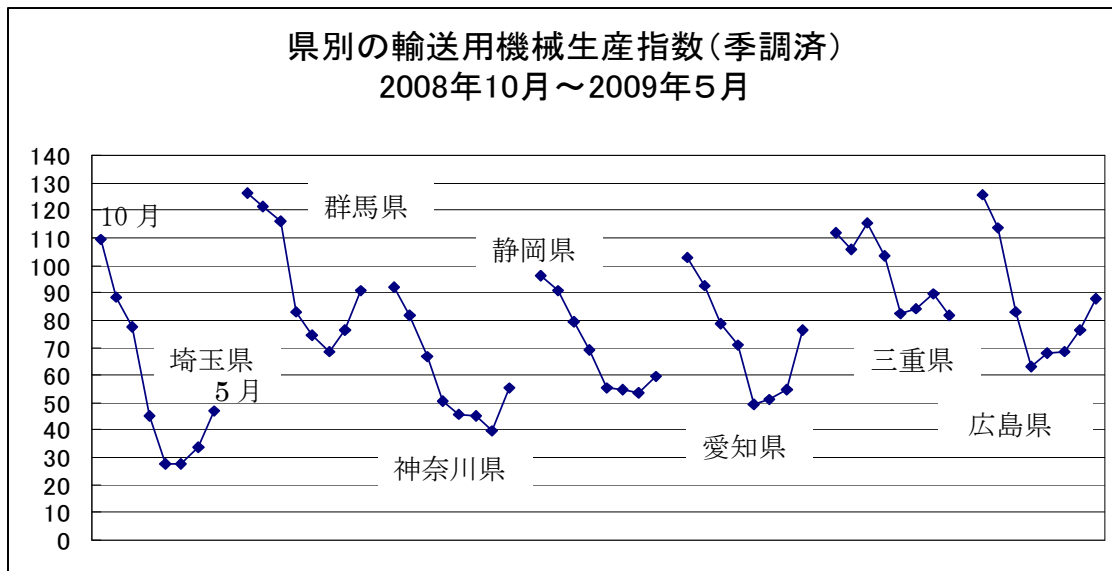
● 街角経済レポート

かなり重症だった県内輸送用機械産業の落ち込み

昨年9月いわゆるリーマンショックを皮切りに“100年に1度の経済危機”が世界を襲った。これによる実態経済の落ち込みが予想以上の速さと大きさであったのはご承知の通りである。中でも自動車を中心とする輸送用機械産業への影響は大きく、アメリカでは、トップに君臨していたGMが経営破たんし追い込まれてしまった。日本も同様に、これまで国内経済・産業のけん引役であったトヨタを始めとする自動車メーカー各社が大幅な赤字を計上することとなった。この結果埼玉県を始め輸送機械産業の集積が進み、基幹産業となっている地域では法人税収入も大幅な減少に見舞われている。しかしながらこの2～3か月、在庫調整が進み、ハイブリット車ニーズの高まりも加わり、生産は持ち直し、水準は低いとは言え、明るい兆しが見え始めてきたようだ。

そうした中、統計が公表されているリーマンショック後の昨年10月から今年5月まで8か月間における全国輸送用機械産業の生産推移を見るといささか興味深い結果となっている。結論から申し上げますと同じ“大幅な落ち込み”とは言え、地域によってその状況はかなり違うことがわかってきた。

下のグラフを見ていただきたい。このグラフは埼玉県を含め輸送用機械製造品出荷額が2兆5,000億円を超える上位7県について、2008年10月から直近5月までの生産指数推移を見たものである。



出所：各県の鉱工業指数から当研究所作成 (2005=100)

まず埼玉県から見てみよう。2008年10月に109.6であった生産指数は、その後急激かつ大幅な低下に見舞われ今年3月には27.5と▲74.9%下落した。グラフ右隣の群馬県などと比較して埼玉県の落ち込みがいかに大きかったかがわかる。

落ち込みボトム時の生産指数をみると前述のように埼玉県では27.5となったが、他県で

低いのは神奈川県 39.7、次いで愛知県 49.3 と、50 未満になったのは 3 県のみで三重県では 5 月の 81.9 にとどまっており、埼玉県より 54.4 ポイントも高い水準となっている。

また減少率についても、神奈川県▲56.8%、愛知県▲51.9%と大きいのが、三重県は▲26.1%、広島県も▲29.3%にとどまっており埼玉県の下落率▲74.9%がいかに大きいかかわかる。このことから輸送用機械生産に関しては上位 7 県のなかで埼玉県が最も痛手を被ったといえるのかもしれない。4 月以降は、2 か月連続で下落幅が縮小しているものの 5 月の生産指数 46.9 は昨年 10 月に比べ▲57.2%と他 6 県と比べ依然極めて低い水準にある。

余談ながら製造品出荷額等では、愛知県が最も多く 24 兆 3,358 億円、ついで静岡県 5 兆 8,778 億円、神奈川県 4 兆 3,938 億円と続いており、埼玉県は 5 位の 2 兆 7,240 億円となっている。埼玉県輸送用機械製造品出荷額等は県内ではトップシェアながら製造業全体に占める割合は 18.2%と他県に比べ非常に小さい。逆説的に県内製造業は各業種がバランスよく集積しているとも言えよう。

輸送用機械製造品出荷額等の上位 7 県 (2 兆 5,000 億円超)

順位	県名	輸送用機械製造品出荷額等	県内製造業に占める輸送用機械の割合
1	愛知県	24 兆 3,358 億円	51.3%
2	静岡県	5 兆 8,778 億円	30.3%
3	神奈川県	4 兆 3,938 億円	21.8%
4	三重県	3 兆 0,029 億円	25.9%
5	埼玉県	2 兆 7,240 億円	18.2%
6	広島県	2 兆 6,125 億円	25.8%
7	群馬県	2 兆 5,368 億円	31.2%

出所：工業統計表(2007)経済産業省より当研究所作成

なぜ埼玉県の輸送用機械生産がこのように落ち込んだのか？最後に埼玉県の状況を分析してみよう。埼玉県の輸送用機械製造の中心をなすのは狭山市のホンダである。では同じように鈴鹿市にホンダが生産拠点を置く三重県の落ち込みが少ないのはなぜだろう？といった疑問が浮かび上がってくる。

これはどうやら狭山と鈴鹿の生産車種に起因していることがあるようだ。狭山はアコードやレジェンドといった車種を中心に製造、かたや鈴鹿には話題のハイブリッド車、インサイトのラインがある。さらにホンダは 3 月にはインサイト増産のため狭山から鈴鹿へ 400 人の従業員を派遣さえしている。しかしながら 8 月からはこの 400 人を狭山に戻し、本来の 4 輪車の増産体制に入るとのことだ。埼玉県の輸送用機械生産も、これからいよいよ反転攻勢が始まることを期待したい。(2009 年 8 月)